

炎 に 死 す

高木徳一



第一回『鶴』シニア自分史
大賞入選作（改訂版）

ったネクタイを昇一の胸に当てた。

「締めてみよう。・・・、どうかな？」「あの鏡で見たら」

移動した昇一は、「いけるよ。明日からして行こう」と声を弾ませる。

「本当、嬉しいわ。そんなに気に入って貰えて」表に出てから肩を組んだ二つの影が街並みをゆつくり進む。

昇一は週に三日位、それも不定期にしかテニスに出られなくなった。彼の居ないコートが砂漠に思えた。月一遍の逢瀬も二ヶ月に一回と減る。だが、貯金の額だけは確実に増えていった。夢である優勝の感激は未だお預けのままである。

四、結婚を見送る

東京には珍しく三年振りに小雪がちらついた。雪絵は昼休みにトイレに入り、済ませ、ドアのノブに手を掛ける。

「係長、部長のお嬢さんとお見合いしたんですってよ」「本当・・・、ゼーん然知らなかった」「お嬢さん、W大学英文科卒で、ペラペラだそうよ、会話なんか」「これで出世も約束されたもんね」

「雪絵は何ぼやばやしてるんだろ。身分をわきまえず、係長の尻ばかり追っ掛けてんだから。」

こうなるのはなから判ってるのに。あれ程注意したのに、天罰よ「雪ちゃん、自分に合った男を探せばいいのに」「ちよっと綺麗だからって、自惚れているのよ」

自分の耳を疑う。頭の中を白い物が波紋のように拡がる。どの位の時間が経ったのか・・・。

ドアにもたれて、やっとの思いで立ち上がり、事

務室に戻った。

「雪絵さん、何処に行っていたのよう。さつきからお得意さんからの電話が鳴りつ放し。困るんだなあ、行き先を言っておかなくちゃあ」「済みません。気分が悪く、頭が痛いので早退させて頂きました」「そう言えば、顔が真つ青。いいわよ、仕事の方は何とかするから・・。お大事にね」

何時の間にか、アパートの前に居た。キーが上手く入らない。部屋に上がり、布団を引き摺り降ろした。一升瓶をコップに傾け、二杯、三杯と一気にあおる。

（夢よ、明日になれば元通りよ）両手を胸の上で組み、呪文のように何度もそれを繰り返す。

（貴女は妹と言う名のペットに過ぎなかったのよ）冷静な影の雪絵が頭の中に土足で入り込んだ。（嘘だ！信じられない。結婚なんて大それた事はこれっぽちも、いえ、一パーセントはあったかも。そんな事じゃない。兄貴なら、今度見合いが

あるんだと、何故一言妹に・・）

（宿命よ。人生の一経験と思えば安い授業料よ）

（二人の貯金は・・。施しをする満足感）

（そう興奮せずに寝入ったら）

（いやよ、直接聞くわ、真実を）

（知ってどうするの？心の深淵は当人だつて認識してないのよ。止めなさい。一層惨めになるだけ）

（ワツと泣き叫んで、ケロッと忘れろと言うの。まるで喜劇ね）

（そうよ、この世は喜劇なの。演出家に踊らされて夢を見ているだけ）

枕カバーの冷たい感触が雪絵の頬を凍らせる。

「お姉・・、お姉ちゃん」雪絵は遠くの方に音声を感じた。

「うなされて、汗びつしよりよ。早く着替えないと風邪引くから」

台所に一升瓶がでんと、横にコップが転がり、唸

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。